

「人違い」

使用者委員 濱上剛一郎

先日、街中を歩いている時、2～3メートル先を横切る人がいて、知り合いの方だと思い、駆け寄って挨拶をしたら人違いだった。マスクをつけてはいらしたが、お顔の雰囲気や背格好がよく似ていらっしやった。よくよくお顔を見ると別の方だった。「失礼しました。」と言いつつ微妙な雰囲気に。マスク生活に慣れてはきているが間違いをしてしまった。相手を傷つけた訳ではなさそうだったのでよかったが、未だにマスクをつけなくてはならない状況を恨みたくなった。

コロナのまん延当初から、マスク着用、手洗い、ソーシャルディスタンスの確保など感染防止対策が半ば強制され、それが日常になりつつある。働き方にも変化が起きた。在宅勤務、テレワーク、オンライン会議など多様化が進んだ。通勤ラッシュに巻き込まれず、どこでも仕事ができ、人が移動することなく会議などもでき、時間が有効に使えるようになった。また、地方回帰の機運が盛り上がり、地方への移住者も出るなどプラス面が目立った。オンライン飲み会もやってみるとなかなか面白いという声も出てきた。遅れていた日本のデジタル化が進展する追い風にもなった。一方で、ここにきてマイナス面を指摘する声も目立ってきた。その多くがきちんとしたコミュニケーションが取れなくなったということだ。在宅勤務で疑問やわからないことがあった時にちょっとした雑談ができずに、孤独感が強まり、場合によってはうつ病を発症する人もいるという。オンライン会議をしても報告、連絡はできるが、どうしても込み入った話はしにくいなど。若い社員の中には就職活動や新人研修もオンラインで受けているので、対面でのコミュニケーションが苦手で、自分のスキルアップができてるか心配だという声まであるそうだ。育児や介護の必要がある人、また病気や障害を持った人が出社せずに仕事ができる、田舎志向の人がどこでも仕事ができるなど環境が整ったのはいいことだが、多様な働き方は認めつつも、原則はやはりリアルでの働き方が望ましいと思う。ある全国的に有名なIT企業は、脱マスク宣言までしたという。この企業は2年半前から在宅勤務体制を徹底するなど感染防止には先進的な企業だが、出社して仕事をする人は原則、マスクは外すことを決めたそうだ。人の表情が見えず、コミュニケーションの質が低下し、経営判断が遅れるとの理由だそうだ。強制ではないそうだが思い切った判断だ。この所の新型コロナウイルスの拡大傾向は気になるが、デジタル化によるプラス面は大いに享受しつつ、社会経済活動がコロナ禍以前の状態に戻ることを切に願う。人違いをしないためにも。ちなみにこのコラムの冒頭に記した、声をかけ、知っている方だと私が思いこんだのは公益委員の新納先生でした。